ゆゑ、四時常にあり、山の絶頂より下廿町ばかりに五葉坂あり、萬松環り圍む事數十回、この鳥其間に棲宿し、曾て他所へ行かず、見る人尤稀なり、たま〳〵見得る者あれば、以て奇瑞とすと云ふ、此鳥よく火災をさくとなん、昔後鳥羽院の御製の和歌ありて、夫木集に載すと云へり、其歌、白山の松の木陰にかくろひて安らにすめる鵜の鳥かな、國に小武友梅と云ふ老人あり、家素より豪富にて好事の雅人なり、平生山水の癖ありて、天下の名山奇水遊歴せずと云ふことなし、常に白山の神を崇信し度々山上し、路に休所の廬を結び、往來の人をやすらはしめ、したしく彼鳥を目擊し、圖繪して風早實積卿に因りて、靈元帝の御覽に入る、亦かの歌を實積卿に請けて、その上に題せしめ、亦予○伊藤東涯に其記を作らしむ、近比亦刊刻して畫軸となし、世に行ふときく、比日偶古文品外錄を閲るに、宋の晁禎之が新城遊北山記をのす、云々旁皆大松云々、松間藤數十尺、蜿蜒如大蛇、其上有鳥、黑如鴉、赤冠長喙、俛而啄、磔然有聲云々、此樣子を考ふるに、たしかに鵜の鳥と見えたり、

〔鋸屑譚〕越之白山、雷鳥と稱するものあり、人まれに見るといへり、其形如雌雉、而較少文采耳、○中略或以爲爾雅所謂鷴者不是、五雜俎曰、雷之形、人常有見之者、大約似雌雞、肉翅、其響乃兩翅奮撲作聲也、此稍爲近矣、夏小正云、雉震呴、余居近山、震時必聞雉聲、人謂之合音、物類之感可見矣、又云、雷不必聞、惟雉爲必聞之、餘冬序錄、野雉知雷起處、此語によれば、白山の鳥、五雜、俎說亦雉の類なり、安房國二山と名づくる處あり、毎歲正月そのあたりの俗群集して雷狩をなす、多く獲てころせば其夏必雷鳴稀にして、あれどもすくなし、もし獲物多からざれば、雷も又多しといへり、其形鵰鶚のごとしといふ、此亦一奇事といふべし、是豈雷神之所好之獸乎、鳥獸之有異類、擧げてかぞふべからず、此鳥獸をたゞちに雷とするは亦愚なりといふべし、伯耆風土記云、震動之時、雞雉悚懼、則鳴踰嶺谷、卽蹬踊也、蜥蜴之雨、雹、虬龍之降雨、雖奪化工之妙、而還眞是此化工之妙、何疑之有、